

アクシャヤ・トゥリティヤのお祝い

クリシュナ神の永遠なる恩恵 『マハーバーラタ』の物語より

高潔なユディシュティラを長とする正義のパーンダヴァ兄弟は、ハースティナプラ王国の継承者でした。しかし、彼らのいとこ、ドゥリョーダナは彼らの幸運をねたんで、策略を使って王国を奪い、12年間森に住むようにと、彼らを追放しました。

追放されていた間、パーンダヴァたちは多くの苦難に出会いました。荒野で暮らしていたので、暑さと寒さをこらえ、食物は不足しました。彼らが放浪を始めたころ、ユディシュティラは太陽の神であるスーリヤに恩恵を懇願しました。スーリヤ神はユディシュティラの祈りを聞いて、空から降りて彼の前に現れました。彼が身に着けている甲冑(かっちゅう)は黄金の炎で、手には太陽である彼自身のように光り輝く神秘的な器、アクシャヤ・パートラがありました。

「パーンドゥの長男よ、この神聖な器を見なさい。これは神の永遠なる恩恵の象徴だ。この器から、おまえたち兄弟は毎日の食物を取らなければならない。おまえたちが満腹になったら、おまえたちの妻、ドラウパディーが最後に食べなさい。私は約束する。そうすれば、おまえの家族が空腹に悩む事はないだろう」

パーンダヴァたちは太陽の神の贈り物に感謝して、毎日神の指示に従ってアクシャヤ・パートラから食物を食べました。皆が食べ終わると、ドラウパディーが彼女の分を食べました。その後、器は空のままでしたが、翌朝には不思議なことに、また食べ物で満たされるのでした。

この時期に、邪悪なドゥリョーダナは、もう一つのわなを仕掛けました、彼はパーンダヴァがアクシャヤ・パートラを持っていることを知らなかったのも、彼らがこじきのように暮らしていると思っていました。彼らが住む森は荒れ果てて、草と枝で作られた質素な小屋に寝ていました。持っているものといえば身に着けている服しかなかったのです。

そこで、ドゥリョーダナは、彼らの苦境をどう利用しようかと考えました。何週間も、彼は強力な賢人、ドゥルヴァーサー・ムニに敬意を表して、彼と彼に従う1万人の信者に食物を提供し、恩恵を得ようと期待しました。ドゥルヴァーサーの怒りは世界中で有名でした。ほんの少しの無礼にも呪いをかけたので、王も神も彼の激怒を恐れていました。しかし、ドゥリョーダナのささげものに満足して賢人は言いました。「私はとても気に入った。何でも希望を言いなさい。それはかなえられるだろう」

ドゥリョーダナは、この瞬間を待っていました。敵を壊滅できるときです。彼は、パーンダヴァたちが賢人を賓客として迎え、その一行に食事を提供することはできないだろうと思いました。その結果、ドゥルヴァーサーはきっと家族全員に呪いを言い渡すに違いありません。ドゥリョーダナ

は寛大さを装ってドウルヴァーサーに言いました。「おお、偉大なるサードゥよ、ヨーギの皇帝よ。森に住むパーンダヴァたちを訪問なさってはいかがでしょうか。彼らは私の友達で、とても信心深い人たちです。あなたの訪問は彼らに大きな喜びを与えるでしょう。どうか、行って祝福してやってください」。賢人はうなずくと、次の日にパーンダヴァを訪ねようと、彼の 1 万人の弟子を連れて出発しました。

ユディシュティラは賢人がやって来るのを見て、兄弟たちと出迎えました。彼は手を合わせてリシを歓迎して言いました。「賢人よ、どうか川で水浴びをなさってください。その後で、あなたと弟子の皆さんに食事を差し上げましょう」

ドラウパディーは王子の妻たちの中でも輝く宝石でした。何年にもわたる追放にも、彼女はパーンダヴァのグルであるクリシュナ神を常に敬愛していました。彼女は多くの苦難に勇敢に立ち向かいましたが、ドウルヴァーサーと 1 万人の弟子たちが森の隠れ家に近づいてくるのを見て、恐れおののいてしまいました。彼女はちょうど今日の食事を食べ終わったところで、アクシャヤ・パートラは空でした。空腹な賢人と彼の弟子たちに食べさせるものは何もありませんでした。

ドラウパディーは走って小屋に入ると、ひざまずいてクリシュナ神に一心に祈りました。

「シュリー・クリシュナ、
限りない力の持ち主、
あなたは悩める者の疲れを知らぬ英雄、
あらゆる世界と創造物の保護者、
高きものの至上、あまねくものの偉大な守護者。

あなたの保護の下で、おお神々の主よ、
すべての悪が恐ろしさを失う。
すでにいくたびも私を救ってくださったように
この難儀から私を救ってください」

彼女の祈りを聞くや否や、クリシュナ神はドラウパディーの前に現れました。彼はあらゆる天上のものと同じように輝き、まさに真理と正義の具現でした。彼はドラウパディーに言いました。「私はお腹がすいた。早く、何か私を満たすものを持ってきておくれ」

ドラウパディーはあつけに取られながら訴えました。「でも神よ、食べるものは何もないのです。アクシャヤ・パートラは空っぽで、ドウルヴァーサーは私たちを怒るでしょう。どうか助けてください」

クリシュナ神は再び命令しました。「早く、早く、お腹が鳴っている。スーリヤの器を持ってきなさい。きっと何か残っているはずだ」

混乱して我を失い、ドラウパディーは動けなくなっていました。愛する神は本気なのでしょう。それとも、冗談を言ってからかっているのでしょうか。そんなことは関係ありません。クリシュナ神を完全に信頼している彼女はこう考えました。「神を信じて、彼の命令に従うのが私のダルマだ。彼は見えないものを見て、不可能を可能にする。私は彼の望み通りにしよう」。このような意図で、彼女はアクシャヤ・パートラを持ってきました。すべての心に宿る神、シュリー・クリシュナは、指で器の縁をぐるりとさわると、器が空ではないことを発見しました。1粒の米がくっついていました。彼はその米粒を喜んで食べ、それを味わいながら叫びました。「どうか宇宙の魂であるハリが、このささげものに満足するように」

パーンダヴァたちの中で最も強いビーマは、この神聖な戯れを目撃していました。クリシュナ神は彼の方に向けて言いました。「早く行ってドゥルヴァーサーとその一行を食事に招待しなさい」

その頃、まだ水浴びしていたドゥルヴァーサーとその一行は、急に食べたい気持ちが無くなってしまいました。弟子の1人が問いかけました。「おお、尊い賢人よ、どうしたら良いのでしょうか。皆、満腹です。パーンダヴァの饗宴を受けるのは無理です」。それに答えてリシは言いました。「招待を受けて、今になってそれを断るのは重大な過ちだ。ユディシュティラとその兄弟は徳の高い者たちだが、戦士だ。この不誠実な行為は彼らを激怒させるかもしれない。彼らが戻ってくる前に逃げてしまおう」

ビーマは、クリシュナ神から言われて川岸に行きましたが、ドゥルヴァーサーとその一行は早々とパーンダヴァの隠れ家から逃げた後でした。ユディシュティラは弟のところに行って、どうしてこんなことになったのかを聞くと、ビーマはクリシュナ神の介在を話しました。すぐに、パーンダヴァたちはグルを探そうと小屋に向かいました。

神聖な神はにこやかに彼らを迎えました。ドラウパディーは、どのようにクリシュナ神が現われて、アクシャヤ・パートラに残っていた1粒の米をおいしそうに食べたかを話しました。パーンダヴァたちの眼は感謝で涙があふれ、そして彼に頭を垂れました。

クリシュナ神は言いました。「ドラウパディーが心から祈ったので、私はここにいるのだ。彼女のささげものはつつましい1粒の米だったが、彼女の信仰と敬愛は私を喜ばせた。彼女が私を信じる心は揺るがなかった。自らの義務を神へのささげものとして愛をもって行うとき、それはほんの小さな善行でも多くを高める力となるのだ」

「ドラウパディーはパーンダヴァたちと同じようにダルマを守った。常に覚えていなさい。アクシャヤ・パートラのように、神の恩恵は不朽で永遠だ。そして高德の者、神に救いを求める者に、勝利は確実だ。では、私は家に帰ろう。繁栄が常におまえたちにあるように」

ユディシュティラはクリシュナ神に言いました。「神よ、あなたは平和の源であり繁栄の住みかです。私たちは何度も頭を垂れます。そして常に心の中であなたを覚えていますように」

すべてのものは永遠なる神の内に存在します。まさに、クリシュナ神の満足は、それが1粒の米であっても、最も思いがけない方法で1万人の空腹を満たし、パーンダヴァたちを救ったのです。

アクシャヤ・トウリティヤについて

伝説によると、スーリヤ神はアクシャヤ・トウリティヤと呼ばれる日に、神聖な器をパーンダヴァに与えました。それは、インド暦で最も神聖だと考えられている、3日と半日のうちの1日です。賢人ヴェーダ・ヴァーサもこの聖なる日に『マハーバーラタ』の創作を始めました。この喜びと豊かさを祝う時期は、新しい計画を始めたり、精神修行を実践したりするのに縁起の良いときです。

© SYDA Foundation. 著作権所有。